
転生先は…………リリカルでマジカルなの…………

555

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は……リリカルでマジカルなの……

【Nコード】

N6143Z

【作者名】

555

【あらすじ】

ある日俺は3人組の小学生の女子共を助けて死んだ、そして気付くと死後の世界に居た。俺はどうやら転生させられるそうだが、でも普通の日常にチートなんか必要なくね？と考えたが、うん結論から言うとチートになっちった☆てな訳で俺は原作ブレイクとか介入とかしないから☆

※これは作者の暇潰し兼練習の処女作です。よって亀更新、駄文、グダグダの三拍子整った糞作品です。それでも良いと言う心の器が広い方のみどうぞ

俺は普通の日常に転生する事になった……………よね？

「で、ここどこ？」

何も無い空間で俺は気が付くと寝転がっていた。

「お主、ちっと寛ぎ過ぎじゃね？」

「おう爺さん、ここ何処よ？あんた誰？」

俺は目の前に現れた爺さんにここが何処か聞く事にした。

「ここは死後の世界。つまりお主は死んだんじゃ」

「ふん」

「いや…ふんって……」

別に疑っている訳じゃ無い。確かに俺は死んだからな。確か俺はあの馬鹿共が車に轢かれそうだったから突き飛ばして俺が身代わりになった筈だからな。

「でお主には転生してもらう」

「え…やだ…」

「え？やなの？」

「首傾げんな気持ち悪い」

「ガーン」

実を言うと凄く眠いんだ俺。転生？知らないねそんな面倒な事なんかにつき合えるか

「本当にお願います！！！」

なんか土下座して来ただけだ。神様が。

「と、取り敢えず理由を聞こうか？」

俺は理由を聞く事にした。神様が言うには俺が突き飛ばした3人組の女子は本来事故に遭遇する筈は無かったらしい、つまり神様の書類ミスで彼女達は死まう所を俺が助けて俺のやった事が天界では受けが良かったらしく俺を転生させてくれるらしい。でも転生をさせなかったらこの神様はクビらしい。

「はア。わかったよ」

「本当かの!？」

「ああ、やってやるよ」

「では転生する際の特典を3個まで授けよう」

「いらねー」

「へ？チートでも何でも良いんじゃないぞ？」

「だって平穩に暮らすのに武器なんかいるか？」

「だ、だがな……」

「じゃあ、俺の生前の家族の幸せと俺が助けた奴等の幸せとクラスメイトの幸せを保証してくれればいい」

「そんなの力を使わない位簡単なのじゃが……」

「言われてもなあ。どの世界に行くのかも知らないし

「じゃあ、どの世界に転生するんだ？」

「うむ、リリカルなのはと言う世界じゃ」

「アニメか？俺そう言うのあんま見てないんだよな。ガンダムは見たけど。」

「うーーーーー……」

それから俺は二時間考え込んだが何にも欲しい物が浮かんで来なかった為取り敢えず神様に全部任せる事にした。その為なにやら天界の神様が全員集まって会議をしているらしい。人間1人に大げさな。

「では、あの転生者の人間の魔改造を始める。では神様1君、彼の望みは？」

「はい、あの人間の望みは自分の傍の人間の幸せだそうです」

「欲が無いのう……」

「前の転生者なんて凄いいチートだったのにね」

「なんだっけ？王の財宝と魔力SSSオーバーとイケメンだっけ？」

「デブのキモオタだったらしいよ？」

「あー、確かに笑い方がフヒヒだったからねー」

「あれ？アイツの担当って神ちゃんだっけ？」

「そだよー。でも今回の子は将来可愛い男の娘になるだろうねー」

「ねー」

「ゴホン、では魔改造は此方で仕切ろうか」

と言う事で何だかんだで決ったのが以下の通り。

・魔力ランクEX

- ・デバイスは超高性能のインテリジェントデバイスの一つと超高性能ユニゾンデバイスを一つ

・主人公の生まれは大分不幸。（中二病の神5が提案した）

・容姿は男の娘。
（神ちゃんの趣味）

・レアスキルとして東方風に『何でも出来る程度』の能力』を付加

・宝具などの武装系統は全て王の財宝に格納済み及び射出可能

- ・身体能力と知能は最高ランク

- ・アカシックコードのアクセス権を取得

- ・演算システムヴェーダのアクセス権を取得

「オイ」

「どうしたんじや？」

「普通の日常にしてくれるんじゃない？」

「知らんのう。では行つて参れ」

「……は？」

そして行き成り俺の足元は宙に浮かび上がる。

「こおおんのおおお糞爺iiiiiiiiiiii!」

そして俺は落ちて行つた。

俺は普通の日常に転生する事になった……………よね？（後書き）

どうでしょうか？

自分には文才が全くと言って良い程に無いので誰かアドバイス下さい。

感想と罵倒是非とも御待ちしております。

あの、ぼく、転生しました……………物凄く不幸ですけど……………

どうも、先日転生した者です。えーと現在5歳です、そして物凄く不幸です。何があったかって？じゃあ簡潔に説明しよう。

・僕、ミッドチルダにて爆誕する（笑）

・僕の両親いきなりログアウト。管理局の仕事の際事故で死んだっぽい

・後日家に黒服の男の集団が押し掛けて来る、そして僕が聖王のクローン体と知る

・色々バイ実験される。四回死に掛ける

・研究所に管理局員が攻めて来る。僕は街に放り出される

・街を彷徨っている。残金210円。↑今ここ

て訳だ、……………どうしようorz

てか管理局員アホ過ぎだろ！？なんで僕見てスルーしてどっかに行っちゃうの！？

はあ、マジでどうすんの？俺は一生を210円で過ごさなきゃいけないのかよ…………

「マジでどうすつか。こうなりゃ魔法でも身に付けて見るか」

と言う事で思い付きで練習してみた。公園で。

結果は大成功。3日で大抵の初歩的な魔法は直ぐにでも撃てるようになった。公園のゴミ箱漁ってミッド式魔法初級編を拾わなかったら何にもならなかったがな。

それと魔法の修行の過程で『何でも出来る程度の能力』が使えるようになった。でこれでお金を創ろうとしたら何か出来なかった。何故…………orz

と言う事で所持金150円なので今日も、もやしを買いに行こうと思います近所のスーパーに行こうと思います。

少年移動中

という訳で着きました。それと今気付いたんですが、時期はStsなんですね、街で金髪の……誰だっけ？まあ良いやそれとあの魔王様が表紙の雑誌を見つけました。

「もやしもやしと、あった。ん？うお！すげえ！もやしが一袋十円だって！？」

と言う事でもやしを15袋買いました。よし！所持金は0だけど食料は一杯確保したぜ！

よし！早速帰ったら調理だ！

少年移動中

忌々しい嗚呼忌々しい。え？何があったかって？それが自分の公園のベンチ（マイホームとも言う）に帰宅したらピンクの髪の美少女と赤髪のイケメン野郎がイチャイチャしてんですよ。あ、別に嫉妬って訳じゃ無いですよ？僕だって本気出せば女の子の一人位楽勝ですよ？

話が逸れましたが取り敢えず僕は先にもやしを調理しようと思います。

少年の三分クッキング？開始！

まずもやしを袋から出します。

そして水で洗い蒂を全部耂ります。

そのご袋に戻して

終了です

少年の三分クッキング？終了！

え？もう終わりがって？当たり前じゃないですか、火も無いのですし魔法なんて使って管理局に保護される……なんて……

そして僕は気付く

「……保護して貰えれば」

だがどうやって？　そういえば管理局は日本という警察機関だよな？
てことは問題を起こせば？　いやそれじゃあ僕は犯罪者じゃん。じゃあどうするか？　うーうーうーむ。

「駄目だ………orz」

そういえば、なのは詳しく読んでないから良く分かんが、確か管理局は万年人手不足だった筈。と言うことは魔力を開放してみれば？　多少強引だが。やるだけやってみるか

「とりあえずSSS位？」

と僕は魔力を放出して見ると地面に軽いクレーターが出来る。するとやはり周りの人がざわざわしているが何故か僕のマイホームに座っていたバカカップルがなにやら焦って喋っている。不倫発覚？

どうでもいいか、取り敢えず魔力を放出し続けているが、何にも無いな。精々回りの人が居なくなっただけのバカカップルしか居なくなる位だ。もうちょっと多くないと駄目？

「もうちょいか」

俺は取り敢えずランクがあるならSSSSS位は在るであろう魔力を出してみると例のバカカップルは驚きで目を見開いている。まだ一割も出してないんだけどな……

「君！　そこで何しているの！？」

不意に上空から声を掛けられる。上を向くと金髪の美女と栗色の髪の毛の美女の二人が居た。てかあれ主人公じゃんorz僕はもしかするとあの伝説の肉体言語「O☆H A☆N A☆S H I☆」を受けるのだろうか？

「あ……あの…管理局の方でしょうか？　（ガタガタ）」

「そうだけど、君は何で震えているの？」

「ヒィ！！？」

やばいやばい、魔王様が降臨なされた！？　殺される！！

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ちょ、ちょっと!?!? どうしたの!?!?」

僕の素晴らしき土下座を披露すると声的に金髪の美女が此方に降りてくる。ヤバイ! 殺される!!

「ごめんなさい! 謝るのでどうか痛くしないで下さい!!!」

僕の土下座十命乞い十頭の上下運動で必死に許しを乞う。あ、ヤバイ。頭が割れる、血も出てきてる。一旦やめて二人の様子を見ようと顔を上げると

「だ、大丈夫?」

と僕に手を差し伸べる魔王様、普通は考えてこれは許してくれたと思うがそれじゃ駄目だ。なにせ魔王様の特技は砲撃魔法で趣味は砲撃を人に撃つ事だ。だから安心してはいけない。よって俺の行動は「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

土下座に限る。これを十数分繰り返した後でようやく僕は落ち着きを取り戻す。

「あ、あの、本当に僕は助かるのでしょうか?」

「うん、そうだよ?」

「あ、それよりさっきの魔力は君の?」

「ハイ、多分そうだと思います。」

「だったら貴方を管理局で保護します」

我が世の春が来たアアアアアアアアアア!

「是非! とも!! お願いしたいです!!!」

俺はそのままやしを回収して管理局の本局に向かう事になった。そんな時に魔王様は僕に聞いてくる

「あ、そうだ、君って名前はなんて言うの?」

あ、そういえば僕名前付けてなかったな。前世の名前じゃなんか「サクヤ・イザヨイです。」

うん、東方なんだなこれが。理由? 思いつきだけど? まあ顔は結構似てる方だしね?

と言う事で着きました、管理局。そして俺はまさかの機動6課で事情聴取をされる事になった。

因みに聴取の相手は努力の天才ことティアナさんだ

「でなんでサクヤちゃんはある所に居たの？お母さんとお父さんは？」

「えっと、単に住居と食料が無かったからで、両親は既に死去します」

「…………そう、で貴方は魔導師になる気はあるかしら？」

「うーんと、衣食住が保障されるなら？」

「どうして疑問系かは聞かないとして、衣食住は保障できるわ」

「だったらお願いします！！」

「え、ええ。それじゃあ私は部隊長に言ってくるわね」

といってティアナさんは部屋から出て行く。そして数分が経ち三人の女性が入ってくる

「へー、君があのとんでも無い魔力の持ち主っちゅう子か」

現れたのはあの豆狸こと八神はやてさんだった。てか今気付いたら金髪の人ってフェイトじゃん！？」

「えっと、あの？」

「ああ、すまんかったな、うちの名前は八神はやてって言うんや。宜しくな？サクヤちゃん」

「あ、はい。」

「宜しくねサクヤちゃん」

「宜しくサクヤ」

「はい、宜しくお願いします。」

てか皆なんでちゃん付け？

「あの、何故僕の名前はちゃんなのでしょうか？」

「何故ってそりゃあサクヤちゃんって女の子やろ？」

「いや、僕は普通に男ですよ？」

「へ」

「へ？」

「「「えーーーーー！！！！」」」

「うえっ!？」

とまあテンプレ的な驚かれ方した後俺は魔力を測ることになったのだが

「予想外やな……」

「うん……」

「そうだね……」

結果ランクはEXらしい。それとさっき気付いたのだが僕のポケットに黒い宝石が付いた指輪と手紙が入っていた。手紙には『デバイスは入れといたぜ!! 好きに使ってくれ!! by 神様5』
神様5って誰だよ……てか5ってまだまだ居んのかよ……

と俺は軽く人生に挫折しかけていた時に所謂念話が掛ってきた

『問おう、貴方が私のマスターか?』

「セ○バー!？」

『冗談だ』

「冗談かよ!？」

『それはさて置き。とりあえず貴公がマスターで良いのだな?』

「あ、うん。名前はサクヤ・イザヨイだから」

『それなんて東○?』

「うるせー!! そうだ、セッティングって出来る?」

『勿論。因みに我は超高性能だぞ?』

「ほう、してどんな機能が?」

『MS系統は全てインストールされている。MAは出来るが魔力が超無くなるから気を付けろよ』

「マジ!? てことはスローネツヴァイとかは!？」

『ふんサクヤよ? 我を誰だと思っている? 我だぞ? 故に可能だ!!』
よつつつつつつつしゃーーーーー!!!!!!!!

「んじゃあ、早く早く!」

『その前に我に名前を付けて欲しいのだが』

「んじゃあガンダム繋がりでヴェーダで良いんじゃないか？」

『ふむ了承した。ではサクヤ行くぞ？』

「おう！逝くぜ（誤字に在らず）！ヴェーダ！」

『「セットアップ！！！」』

思えばこの時何故こんな所でセットアップしたのかは分からないが、数十分後の俺は直ぐに今の俺を殴り飛ばそうとするだろう。

——ガチャ

「テストロッサ、例の書類だが——バトルジャンキーほう」

そうここは6課の隊舎の中。つまりはこの戦闘狂がうろついている場所でもあるのだ。で、そこに見知らぬ奴がバリアジャケットを展開していたらこの人はきつと——

「貴様、私と勝負しろ」

——なんて言い出すのだから。

あの、ぼく、転生しました……………物凄く不幸ですけど……………（後書き）

正直言うと、駄文だなーと感じております。

そして見てくれる方には多大な感謝をしております更に感想をくれたら
作者は狂喜乱舞してしまいます。

と思っていたら、早速感想が！？菊ポン様本当にありがとうございます
ます！！作者は土下座のやり過ぎで最早頭の原型を留めておりませ
んがそれでも感謝し続けます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143z/>

転生先は……リリカルでマジカルなの……

2011年12月21日03時50分発行